

第4回 これからも川とともに生きる
～川とのかかわりを教えることが環境教育の出発点～

日 時：平成18年1月12日（木） 18：00～20：00

会 場：交流体験館 ホール（川口町）

ゲスト：河合佳代子氏（UFMネイチャースクール社長・
環境コーディネーター）

ホスト：豊口 協氏（長岡造形大学理事長）

（司 会）：皆様、大変お待たせいたしました。ただ今より、我ら信濃川を愛する信濃川自由大学を開校いたします。本日はお忙しい中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。私は本日、司会進行役を務めさせていただきます南魚沼市にありますがFM雪国のパーソナリティの滝沢と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

さて、信濃川自由大学は、信濃川の自然や歴史など、その魅力を広く地域の方々を知っていただくために開校しまして、この川口町会場で第4回目の開催となります。今年5月まで毎月1回、各地でこの信濃川自由大学が開催されまして、毎回、信濃川に縁のありますゲストの方々からさまざまなお話をお聞きいたしております。皆様、お時間がございましたら、是非、ご参加いただければと思っております。お待ちしております。

それでは、はじめに主催者を代表いたしまして、信濃川河川事務所所長・宮川勇二よりご挨拶を申し上げます。

（宮 川）：皆様、こんばんは。信濃川河川事務所の宮川でございます。本日は例年になく、今年は雪の降るペースが早いというか、非常に寒い中、この信濃川自由大学に来ていただきまして、大変ありがとうございます。今、紹介がありましたように第4回目ということでございまして、これまで3回、長岡、新潟、越路と色々なお話を聞いてきたわけでございます。今日は河合先生をお招きいたしまして、また、時間たっぷり楽しいお話をお聞かせいただけると期待しておりますので、よろしくお願ひしまして、私の挨拶とさせていただきます。

（司 会）：ありがとうございます。それでは、続きまして本日の開催地でございます川口町町長・岡村譲様よりご挨拶をちょうだいいたします。お願ひいたします。

（岡 村）：大変雪深い川口町によろこそおいでくださいました。こんな格好で大変失礼でございますけれども、雪害対策本部と、また、昨日から災害の指定を受けましてやっているとございまして。ご容赦願ひたいと思ひます。

我が川口町は、大河・信濃川と清流・魚野川が合流する自然豊かな河岸段丘の町と、これ

はいつも川口町を紹介する時のうたい文句であります。昔、三国、妻有郷の舟運、物資の輸送で盛んだった宿場町で栄えたところでございます。そのとおり、川の歴史そもそもが町の歴史でもあります。また、東川口というこの下ですけれども、歴史から見ると、船旅の関係からここに居着いたというような住民の方々が大変多くございます。そういう観点から、古くからの伝統文化といいますか、伝統行事というのが新しすぎて育っていないというような現状でもあるかと思っております。川口は川に育てられて生活してきているわけでございますので、やな場というのが魚野川にあります、あれが3か所、5か所と昔はあったわけでございますけれども、それがだんだんと時代とともに川口やな場が残っているだけでございます。

その中で、私たちも小さいときは川が遊び場でありました。プールなどありませんので、夏休みは毎日川に行って上級生から泳ぎ方を習って、あるいは釣りの仕方を習ったりして、川とよく遊んで来ました。そういう中でも、今と比べますと非常に土石が多い、私たちが川と遊んでいる時は石原が多くて、釣りをやっても裸足で歩いても、アユの生息するコケが生えるような石原でございましたが、今は泥で石が隠れて見えないというような状態になってございます。そういう中で、本当に自然が壊れていくといいますか、あるいはそこに棲んでいた昆虫類や魚類がだんだん見えなくなった。昔は魚を握って柳の枝でとって、家に帰って焼いて食べるというような楽しみをしながら川とかかわってきたわけですが、今になると、川は危ないところだというようなことで、人影が見えなくなってきたというようなことで、非常に寂しい思いがするわけでございます。川とともに生きるという中で、是非また先生方のお話を聞きながら川を大事に、あるいは自然と共生するにはどう私たちが日常気を付けなければならないのか、そんなところを学びながら、注目しながら、今日は受講したいと思っております。皆さん方も雪が非常に多いですけれども、今日は夜は晴れ間が出るという予報でございますので、是非、また大雪も思い出の一つとしてお願いしたいと思っております。よろしく申し上げます。ありがとうございました。

(司 会) : ありがとうございます。それでは、第4回目の講座に移らせていただきます。今回の講座のテーマは、「これからも川とともに生きる～川とのかかわりを教えることが環境教育の出発点～」です。本日は、ゲストスピーカーに有限会社 UFM ネイチャースクール社長、環境教育コーディネーターでいらっしゃいます河合佳代子様をお迎えしております。ホストは、長岡造形大学理事長の豊口協先生に務めていただきます。それでは、まずお二人のプロフィールをご紹介させていただきます。

まず、豊口先生ですが、昭和8年東京都のご出身でいらっしゃいます。昭和59年から平成4年まで東京造形大学の学長を務められまして、平成6年に長岡造形大学学長に就任されました。現在は理事長でいらっしゃいます。この他にもGマーク審議委員会委員長や、信濃川におきましても大河津可動堰改築検討委員会委員を務められるなど、各方面でご活躍でございます。また、作品としましては昭和45年の大阪万国博覧会の電気通信館、そして昭和60年のつくば国際科学技術博覧会の東芝館などがございます。そして、皆様ご存じの長岡花

火ネクタイのデザインから世界のデザインへと幅広くご活躍中でございます。

続きまして、河合先生をご紹介します。河合先生は東京都のご出身でいらっしゃいます。高校時代より野外活動、地域活動にかかわられ、大学では野外教育レクリエーションを専攻されました。大学卒業後は、アメリカニュージャージー州立自然保護学校に15か月間滞在され、小中学生の指導にあたられました。帰国後は、財団法人キープ協会、環境教育事業部レンジャーとして4年間勤務されまして、その後、アメリカ・ヨセミテ国立公園夏期実習生としてレンジャー業務を経験されていらっしゃいます。1994年より新潟県にお住まいになりまして、フリーランスの環境教育コーディネーターとして県内外の環境教育、自然体験活動のプランニング、トレーニング、ワークショップなどの活動を行われています。2002年には有限会社UFMネイチャースクールを設立、取締役社長として自然体験活動の企画・実施、自然体験施設のためのコンサルティングなどにご活躍中でございます。それでは河合先生、豊口先生をお迎えいたします。皆様、どうぞ大きな拍手でお迎えくださいませ。それでは、ここからの進行は豊口先生にお願いいたします。どうぞよろしくをお願いいたします。

(豊 口)：こんばんは。今日は大変な雪のシーズンでございますけれども、お集まりいただきましてありがとうございます。これから2時間、皆さん方と一緒に自然環境を含めた環境について、色々と考えさせていただきたいと思っております。今日、来ていただいている河合さんは、理論だけではなくて自分の行動で体験的環境教育ということを実践されてきた方ございまして、実は日本だけではなくて、外国での経験も非常に豊富であります。そういうことを通して、これから将来の新潟県、信濃川環境、さらにはもっと大きく視点を変えれば、地球環境問題にまで私たちはこれから取り組んでいかなければならないわけでありまして、そういう世界で働く人材育成をこの信濃川から発信したいと、信濃川で育って信濃川で学んだ子どもたちが、やがて世界で機能するような人材として地球環境の問題を取り上げてもらうことができれば、これは非常に楽しいことだろうと思えます。そういう意味で、今日ここで環境問題について皆さん方のご意見をいただきながら、将来の私たちの環境に対する考え方をまとめさせていただければという気がいたしております。

実は私、長岡へまいりましたのが12年前でございまして、信濃川の土手に立ったのは16年前でございます。それまで私は東京で生まれ、東京で育っていたわけでありまして、実は川に対する関心というのがあまりなかったのです。東京造形大学にいました時に学生を連れまして、あそこに相模川という川があります。その相模川の上流がちょうど八王子の近くにありまして、それがずっとまっすぐ南へ流れてきて、太平洋に流れ込んでいるわけでありまして、この相模川というのはいったいどういう川なのかということ一度調べてみようということで、学生を連れて現場へまいりました。今思い出しているのですが、その時に大変驚きました。まず、川に出られないところがいっぱいある。特に厚木地域というのは、川に出られないところがいっぱいあるのです。工場が敷地を全部占めておりまして、出られない。そういうふうな川に出られないところがいっぱいありながら、ずっと調べてきました。学生に調べさせて川の中を歩かせたのですが、実は川の中に入れ

ないところがある関係で、大変なことがそこに起こっていたことが分かりました。一番たくさん捨てられていたのが、オートバイと自転車であります。なぜ川の中にオートバイと自転車が捨てられているのか、これも驚きでありました。洗濯機、テレビ、数百という数で相模川の河川敷の中に捨てられていたわけです。私たち学生を含めて大変驚きました。日本の川というのはこんなに生活から離れて汚されているのかということで、大変悲しい思いをしたことがありました。それが心に残っておりまして、長岡へ来て信濃川の土手に立ってあの川の流れを見たときに、私はこんなに美しい川の流れがまだ日本にはあったのだと大変感動いたしました。ちょうどこの前にもお話しましたように、夕方だったものですから西山に太陽がずっと沈んでいく、その太陽の赤い色が透き通っている。だけど、東京で見る夕焼けというのはどす黒くなっている、空気が汚染されていますから、黒い色をした太陽が西へ沈んでいく。こんなに太陽というのは美しかったのだということで、改めてまた感動いたしました。そして、太陽が沈むに従って空の色が変わる、やがて濃紺から紫に変わっていく。そして一瞬ですけれども、金色の光が自然界を飛ぶように走るのです。私は生きていてよかったなど、人生、生きていれば何かいいことがあるのだということで大変感動いたしました。それから私は信濃川が大好きになりました。私に生きていく証を与えてくれたのと、もういっぺん人生を考えてみようということを経験させてくれたのです。

それから、私は新潟県に流れている日本で一番大きな大河・信濃川を中心にして色々なことを学ばせていただきました。その中で出てきた言葉が環境という言葉でありまして、私たちが学生時代にはこの言葉はありませんでした。ちょっと余談ですけれども、河合さんと私とは親子の差があります。ですから、娘と一緒にしゃべっているようなものですが、私が大学生時代には環境という言葉はなかったのです。今になって環境という言葉がいっぱい出てきているわけです。地球環境の問題から始まってありとあらゆるものが環境問題だと、けれども、おそらくまだ学問的な体系はできていないだろうと思います。環境学ということは、それほど世界的に色々問題がありながら、オーソライズされていないのではないかなという気がするのです。そういう意味で、今日は河合さんのお話を聞きながら私も勉強させてもらいたいと思っているのですけれども、それほど私は信濃川が好きになりました。そういう意味で、私は信濃川が好きですけれども、おそらく河合さんも信濃川が好きだろうということで、なぜ好きになったかというお話を最初にしていただきながら、問題にだんだん入っていきたいと思っているのですが、どういう点がお好きですか。

(河合) : はじめまして、河合佳代子と申します。どうぞよろしくお願いたします。

私も実は先生と同じで東京出身です。私の実家のそばには、神田川の支流の善福寺川というのが流れていまして、今でこそ少しまとまって、魚とか鳥などもすむようになったのですが、私が子どもの頃は三面護岸で、子どもの頃に橋の上からなぜか体操着を落としたことがあって、どうしても取ってほしいと思って取ってもらったら、もうドブ臭くて着れなくなってしまったという思い出が、私の子どもの頃の川の思い出です。そして、先ほど紹介にもありましたけれども、そういうところで育ったからこそ逆に自然体験、自然の中で

の活動が好きになって、興味を持って大学でも専攻するようになりました。大学時代、夏休みに子どもたちのキャンプのプログラムで魚野川の方にまいりました。魚野川で初めて大きな浮き輪でプカプカ浮いて遊んだりですとか、カヌーに乗ったり、川で水遊びというのもしたのです。川というのは遊べるのだというのが、支流ですけれども、魚野川の第一声でした。そして、その遊びがどんどん広がっていく、それは川の水だけではなく石でも遊べますし、色々な遊び方ができる、そういったことの発見というのが魚野川、信濃川の一つの出会いでした。

そして、こちらの方に住むようになったのですけれども、実は連れ合いがこちらの方の出身で、結婚する前にこっちの川を是非見てほしいと、私の連れ合いは釣りが趣味でして、自分の好きな川があるから一緒に行こうと誘われたのです。別にこれはのろけ話でも何でもないのですけれども。その川では本当に泳げるのです。先ほど町長さんのお話にもありましたけれども、初めて泳ぎを覚えたのは川だったというのが、まだ私の連れ合いの時代にはその川にはあったわけです。そして、その川で水中めがねをかけて魚を追いかけて、そして砂の中にもスナヤツメですとか、そういった生き物をつかむことができるわけです。そして、その川を上った先のところで温泉か何かに入って、帰りは用水路でプカプカ浮かんで帰ってくる、そんな遊びを彼が紹介してくれて、同じ昭和40年代に生まれた子供であっても、住んでいるところによって川との遊び方がこんなに違うのだということを知ってすごいなと、私は自然に対して夏休みですとか冬休みのたびに、親戚が新潟にいたものですから、こちらの方に来て遊ぶことがあったのですけれども、毎日そうやって遊んでいる人たちが同じ時代にいるのだということに驚きまして、そういった遊びができることで、色々な感性が育っているのだと強く感じました。私はまさに生きている川、今、先生が風景の話をおっしゃって、もちろん風景のすばらしさというのもあるのですけれども、寄って触って体験することができる川、生きている川というのが信濃川のすばらしさであり、そこが生きているからこそ生き物、そして風景も変わっていく、そこが川のすばらしさだと感じた、それが私の信濃川の印象です。

(豊 口) : 今、年齢のギャップを感じているのです。川は遊べるものだとは初めて分かったと、私が育った頃は、川は遊ぶところだったのです。ですから、私が水泳を覚えたのも、川で覚えました。小学校1年の時に上級生がついて来いと、こわい上級生でしたからついていったのです。これから川を渡る、泳げと、“どぶん”と飛び込んだのです。私は泳げませんでしたけれども、そこを渡らないということは日本男子として恥になりますから、とにかく飛び込んだ。しかし、もがいても、なかなか進まない。そのうちに水を飲んでしまって助けてくれと言ったら、みんな向こう岸に着いて笑っているわけです。何で笑っているのかと思ったら、立ってみたら浅いところで立てたのです。それで、初めて水泳を覚えたのと、上級生もそういうことで下級生に水泳を覚えさせるのです。そうすると、それで川が自分の遊び場として生きてくるわけです。すごく楽しい。今度は魚を釣る時も笹の葉っぱみたいなものを持って行って、その先に糸をつけて、針をつけて引っ張っていると、自然に魚がくっついてくる。魚を釣って帰

ってくる。それを上級生がまた生意気な顔をして川の魚は生で食べるぞ、食ってみろと言う。生のまま食べて胃が痛くなったりしたこともありますけれども、そういうふうにして実は川との生活が広がっていったと。それがだんだん時代とともになくなって、川が生活から切り離されてしまった、これが戦後の日本の実態だと思うのです。

日本以外の国へ行っても川というのは必ずあるわけですがけれども、川とそこに住んでいる人との生活というのが、日本人の生活の川との関係と、それぞれの国の人々の川との関係というのは全く違った文化として一つの形態をなしているわけです。そういうものをある程度の年齢になってから知りまして、最も驚いたのが生まれて初めて長期出張で行った台北の町なのですけれども、あそこにタンスイという川が流れています。非常にきれいな名前です。今でもありますけれども、タンスイの下流にゴルフ場があって、日本人がよく行っていましたが、そのタンスイに行ったときに私は魚を釣ってみたいと思って聞いたら、ここは魚が棲んでいない川だということです。どうしてですかと言ったら、とにかく魚を見たことがないと。不思議に思って台北の市内をずっと歩いてみましたら、台北には中小企業がいっぱいあって、その中小企業の工場からの廃液が流れてくる。それが小さい川の中を流れているのですけれども、台北の人が、先生、この川は何という川か知っていますかと、これは黒竜江だと言うのです。廃液で真っ黒なのです。その黒竜江の水が川に流れ込むと、自動的に川の生物を殺してしまうということで、タンスイが全く魚のすまない川になっていて、しかも人々がそこにもものを捨てますから、一時期は発泡スチロールで河口が全部埋まっていたことがあります。今は一生懸命きれいにして、非常に美しい景観に変わっていますけれども、そういうふうにして川との生活のかかわりの中で、川が非常に汚染されてきた時代がたくさんあります。

そういうことを考えた時に、私は長岡でもう一度考えたのですけれども、やっぱりこれからは川を大切にしなければいけないと。これは一つの例ですけれども、長岡造形大学がスタートしたその年に、台北から一人の留学生がやってまいりました。私は台北へ行って講義をしている時に通訳をしてくれた先生の娘さんなのですけれども、私の大学に入ってきました。環境系の学科を選んだ。それで、環境に関する研究をし、大学院を出た。それで、実は卒業の時に1番で出ました。彼女は台北に戻って、このタンスイという川をいかにきれいにしたらいいかということを知濃川の土手に立って考えて、その計画を具体化して、そして台北でタンスイ川をきれいにするプロジェクトに参加しているのです。ですから、既に知濃川というのは国際的に一人の若者を通じて、世界の河川に対する新しいプロジェクトを具体化しているのだということを皆さん方にお伝えしておきたいと思っているのです。やはり時代が変わって、川に対する認識が変わってきた。さっき娘みたいだと言ったのですけれども、この時代がこれからの川を中心とした人間環境といいますか、自然環境といいますか、それらに対して新しい世界的なメッセージを送る時代になってきたのではないかなという気がしているのです。その辺、大変責任重大ですから、その辺の考え方を少しお話ししていただけないか。

(河 合) : 今、先生の方から、川で遊んだ経験というお話がありました。今、私は40代なのです。

地域差はありますけれども、40代の私が川で遊んだ経験がなくなっている。私から下の世代はどんどん割合が増えているわけです。日本人が変わっているというのは、残念ながら事実としてあると思うのです。今の子どもたち、逆に新潟県内の自然豊かな信濃川流域の子どもたちであっても川で遊んでいるかという、よっぽど意識のある地域、もしくは意識のある子どもでないと、今、子どもたちの遊びの主流は何かと言ったら、皆さんお分かりのようにテレビ、テレビゲームで、今、世の中は変な方向に動いて、危ないから子どもたちが一人で歩いてはいけないわけです。親が出かけていない時は何をしていると親は安心かと言うと、家でテレビゲームをしてもらっていた方が安心なわけです。でも、本当にそれでいいのだろうか。すごいですよね、バーチャル。今、“ムシキング”という子どもの虫が出てきたりするのがあったりするのですけれども、生態についても加味してあったりして、よくできています。ただ、私がそこで思うのは、バーチャルと実際は違うのです。私が実際にプログラムをやっている、専門的によく知っている子はたくさんいるのです。鳥とかをよく知っている子が、信濃川の河川敷で鳥を見に行くと、あの鳥は何とかなどと言うと、「えー、違う」「何で?」「僕が知っているあの鳥はもっと大きいもの」と。何を言っているのだろうと思ったら、「君の家のテレビはきっとテレビ画面が大きいんだね。」でも、細かいところはよく知っているのです。あの鳥の羽は、ここがこう立っていて、この色はこうだと。でも、実際の鳥、そこまで詳しく見るためには近づくか、もしくは性能のいい双眼鏡を使うしかないわけです。今の子どもたちは、確かに環境や何かに興味のある子もあって、知識もよく知っているのですけれども、それと実際のものが結びつかない、それとやはりそこにあるものと自分が結びついていないというのが、一つ大きな問題ではないかと思っています。

環境のお話が先生からありましたが、環境教育というのはつながりではないかと思うのです。環境教育の言葉の前にエコロジーという言葉が取りざたされました。エコロジカルな生活、地球にやさしい生活みたいなイメージが一時期あったと思うのですけれども、エコロジーというのはギリシャ語のオイコスという言葉からきているそうです。オイコスというのは家ということらしいのです。家の中には色々なものがあります。その色々なものがつながって家になっているわけです。家の中にあるお台所用品、お鍋もやかんも、それから本も色々なものが組み合わさって、それで初めて家ができています。だからエコロジー、日本語で生態学という訳になると思うのですけれども、生態学というのは何かと言うと、“もの”と“もの”とのつながりなわけです。環境教育というのは、そのこと一つを詳しく知ること大切なのですけれども、もう一つ大切なことは、その“もの”と自分がどうつながっているか、そのことと事実と社会がどういうふうにつながっているかということをつなげて考えられることが、大切な部分ではないかと思うのです。環境教育というのは色々な視点があります。まず関心を持つ、関心を持たないと物事を見てももらえません。それをもっと詳しく知ろうと思って知識、学びが必要です。そして、それにどういうふうに関わるか、そして、それに関わって、その後どういうふうにもそのものに参加していくか。環境教育の元にあるのは、今

の私たちの生活でいいのかというところがあると思うのです。今の私たちの暮らしをしていけば、川はどんどん汚れていく方向に残念ながらなっています。ですけれども、それではちょっとよくない、それではちょっと気持ちが悪いのじゃない。先ほど先生が、信濃川に太陽が沈むのを見て美しいと思って、それが一つ出発点だったというお話がありました。人間の心のどこかに、それが子どもであっても、昔そういう太陽を見たからとか、見たことないからという経験以外のところで太陽のすばらしい夕日を見れば、そこで自然の雄大さ、地球の雄大さ、宇宙の雄大さを感じます。そういったものは、地球に住んでいる生き物としてのスイッチがあるのではないかという気がするのです。ただ、今そのスイッチさえも危なくなっている、そこが環境問題の一番こわいところなのだろうと思います。やはり環境問題は、そのスイッチをどういうふうに地球に生きる生き物として入れていくかというところがとても大切なような気がしています。

(豊 口) : ありがとうございます。ということで、川と人間との関わり合いというのが非常に重要なわけですけれども、世の中の状況を見てみますと、どうもボタンの掛け違いというものがたくさん起こってきているような気がします。基本的に太陽の光もそうですけれども、東京に日本の人口の1割が住んでいる。都会に住んでいる人口と比べますと、かなりの比率で都会に住んでいる子どもたちが増えてきている。そういう子どもたちにいくら言葉で環境問題を話しても、それから他の生物との関わりを話しても分からないだろうという気がするのです。特に都会にいる親というのは、子どもたちに対して川は汚いとか、泥で遊んではいけないとか、土にはどんなものが入っているか分からないとか、裸足で街を歩くことすら許さない。私は考えたのですけれども、東京の子どもで生まれて死ぬまで1回も実際の大地、土を踏まないで一生を終わる子どもがたくさんいるだろうと思うのです。生まれて靴下を履かされて、靴を履かされて車に乗せられて、鉄板の電車に乗って学校へ行って、会社へ行って帰ってきて生活をする、それで一生を終わって、実は土の中に足を突っ込んだことがないという子どもたちが非常に増えてきている。これが生物としてはおかしいという気がするのです。

もっと考えなければいけないのは、日本人というのは昔から自然との共生の動物です。要するに農耕民族ですから、自然と一緒に関わり合いをもってきて、要するに親が自然との関わりの中で子どもたちに生活を教えてやる。春になればこうなるよと、春になったら山菜を採っていらっしやい、おたまじゃくしがいるだろうということを実際の生活の中で子どもたちに教える。私も小さい頃、よく母親から割箸を渡されて、裏の畑へ行ってキャベツについている青虫を捕っていらっしやいと、青虫が食べるとキャベツがだめになるからと言われて、朝学校に行く前に割箸を持って畑へ行って、青虫をつまんで土の中に埋めるわけです。そのうちある日、行ってみると、モンシロチョウになって飛んでいるわけです。青虫がこんなになったのだと。それからお袋に言われても、青虫をつままないで蝶々を見て帰ってきて、取ってきたよと。そうすると、子どもとしては青虫、キャベツ、モンシロチョウとつながりがあるって、こういう美しいものに変っていくのだということによって自然に対して理解が出てくる。そういうことが私の小さい頃にあったし、おそらく日本の国の人はそのような経験をしている

と思うのです。自然と一緒に共生する。だから、日本人は亡くなりますと、“おかくれ”になったと言うのですけれども、これは自然の中に埋没していったということで自然にかえっていきくと、そういう自然との生き方の中でシステムを考えて、自然と人間の関係を考え、生物と自然の関係を考えていったということで、環境教育というのは自然に家庭で行われていた。だから、いちいち教育と言わなくても、それができたのだらうと。ところが、ヨーロッパやアメリカの場合には、かなり環境に対する考え方は違うと思うのです。色々意見はありますけれども、特に外国に行って、環境教育の場で経験してきたことが河合さんはおありですから、その辺の事例を少しお話ししていただけないか。

(河合)：環境教育で、今色々なプログラムと言われる活動の紹介というのがなされています。「パッケージド・プログラム」という言い方をするのですけれども、特にアメリカで盛んなのです。アメリカはご存じのように、マクドナルドに始まってマニュアルが大好きですから、マニュアルがあります。「パッケージド・プログラム」と言って、聞いたこともあると思うのですけれども、ジョセフ・コーネルさんという人が始めたネイチャーゲームという活動だったり、プロジェクトワイルド、プロジェクトラーニング、川の関係で言うと、プロジェクトウエットという水のプログラムというのもあるのです。その他色々な活動があります。それは「パッケージド・プログラム」で、アメリカの学校教育もしくは教育の中で試行錯誤されてまとめられたものなのです。

その中で一つ言えるのは、やはりプロジェクトワイルドというプログラムで、野生と人間の関わりを考えるとというプログラムの活動のまとまったものがあります。向こうでは自然というのはマネジメント、管理するものなのです。人間によって管理されるのが自然で、野生の動物の頭数も人間の管理下によってコントロールできる。プロジェクトワイルドの活動の一つで「オー・ディア」というのがあります。「やあ、鹿さん」という感じのゲームですか、要は鹿が生きていくのに必要なものは、食べ物と場所と水であるという活動なのです。食べ物と水と場所、ラインが二つあって、こっちは鹿さんチーム、こっちは環境チーム、環境チームに三つのサインを覚えさせてあげます。家と食べ物と水です。こっちは鹿も自分の好きなものをポーズをして、鹿チームが環境のところに行って同じポーズをしている人に会うと、その鹿は生き残れるという子ども向けのゲームなのです。そこでは何かというと、要は生き物が生きていくためには、必要な自然界の要素があるのだというのがメッセージとして一つあります。そして、そのゲームを何回かやっていると、当然鹿の数が減っていく時代があります。環境が増えるわけです。環境の人が増えていくと、鹿が今度は劇的に増える時代が来ます。そうやって鹿の頭数というのは環境の変化によって変化していくというのをゲームの中で教えていく。要は環境と個体数のつながりというので、そのバックグラウンドにあるのは、そういうのがあるのだから、狩猟というのはハンティングゲームといって、向こうはスポーツになっていますけれども、そういったハンティングゲームというのもその関わりの中で言えば、許容範囲なのだという裏の話もあるのですけれども、そういったマネジメント、管理というのが特にアメリカ北米では、そういったプログラムというのが強いと思うのです。

ヨーロッパは色々な考え方があったりします。アメリカの事例で言いますと国立公園という考え方、それもアメリカで1800年代後半から始まりました。それはアメリカの東部から西部に開拓に行って、西部に残っている自然のエリアを人が、人と言ってもネイティブアメリカン、いわゆるアメリカ原住民のインディアンと言われる人たちがずっとそこに生活していたのですけれども、白人と言われる開拓者の人たちがそこでむやみに木を切ったり、住んだりしないようにということで自然のエリアを一定のところを柵をかけた、それがアメリカの国立公園です。そういったように、国立公園に柵をかけてしまって、その中で色々なことを制限して、それこそ火災や何かも制限して、火災になったらそのエリア内はちゃんと消火するとか、そういった自然の成り行きではなくて、人間のコントロール下に自然をおくというのが、アメリカでは環境の中でよく行われています。ヨーロッパもそうなのですが、日本の場合にも国立公園があります。ご存じのように全部国有地ではないわけです。私有地も含まれたり、県有地も含まれたりして規制が難しいという話があります。ですけれども、それは逆を返して言えば、日本人は島国という中で限られた国土の中で、その自然を利用して生きてきたわけです。ですから、ある特別なところに柵をかけたからといって、人間生活が排除できるといったものではない。先ほど先生からもちよっとお話がありましたけれども、日本の自然観というのは、アメリカの環境をコントロールする、自然をコントロールするという自然観とはちょっと違うものがあると思うのです。ただ、アメリカの環境教育プログラムのすばらしいところは、活動として起承転結がはっきりして、学びの部分がすごく明確になっている。というのは、やはり環境教育の教材としては使いやすい部分なのです。ただ、気を付けなければいけないのは、そのベースになっている自然観というものが違うということです。日本の場合は、いつも隣に自然があった考え方とか、私は今魚沼市に住んでいるのですけれども、ブナの木がたくさんあります。そのブナの木は今の多くの雪をたくさん受け止めて、緑のダムと言われるブナの腐葉土の中で水を溜めていくわけです。その大きなブナの木を1本切り出すのにも御神酒をかけて、お祈りをして木を切り出したりするわけです。その木は保護する部分はもちろんありますけれども、その木を利用して、逆に間引かないと木が大きくなれないというのも歴史的にあったと思うのですけれども、そういったものをそこにある神に感謝し、むやみに切るということではなくて、感謝する中で利用して使ってきたのが、日本の自然との関わり方だったと思うのです。

(豊 口): 色々な見方があるのですけれども、アメリカの場合は自然を征服するという思想が根底にありました。ですから、征服して人間の力で自然をコントロールする、管理する、そういう思想が今でもアメリカには根強くあるわけです。ところが、日本の場合には自然を征服することではなくて、自然と一緒に共生すると、共に生きていくのだという思想がありますから、基本的なところは違っているという気がするのです。この辺は日本で環境問題を取り上げる時には、基本的なところでこのことを考えておかないといけない、意識を持っていないといけないという気がするのです。

私はたまたまこの間もちよっとお話を申し上げたのですが、国交省のご好意によりまして、

新潟からずっと上流を通って、千曲川を上って甲武信岳まで空から6時間、行かせていただきました。ずっと信濃川と千曲川を拝見して、甲武信岳のそばへ行って源流を見て、その時ちょうど秋だったのですけれども、この自然環境の美しさに圧倒されたのです。特に信濃川と魚野川の合流地点、河岸段丘がぐっと迫ってしまっていて、昔からの街道筋があって、そこに村落があって、その辺から上流の千曲川の方へ上がっていきますと、川に迫ってくる河岸段丘がだんだん消えていきながら、昔、武将たちが戦った草原地帯が見えてくる。それが切れる頃からものすごい紅葉、湧き出てくる雲のような紅葉の中をずっと飛行機が飛んでいくという、その自然を見ていまして、なるほど日本の場合は80%近くが山林になっているわけですが、その中を川が流れている。山林を流れてくる川の水というのは非常にきれいなのですけれども、そういうすばらしい環境が残されているということを知りました。今日ここへまいります時に、河合さんがたまたまこの地域に住んでおられるのですけれども、魚野川と信濃川、そして河岸段丘のすばらしい景観、そして森林地帯、こういうところで実際に環境教育の現場を持っていらっしゃるわけでしょう。ですから、その辺の現代の我々が置かれている環境問題をベースにして、このすばらしい地域の中で子どもたちに対して何を今伝えようとして環境教育をされておられるのか、その辺のことをお話ししていただきたいと思っております。

(河合)：環境教育というのはとても幅広い言葉で、消費者教育も含まれる部分もありますし、色々な部分があります。私が主にやっているのは、自然体験型の環境教育です。今、環境教育という言葉は世界的にはあまり言われなくなっています。どう変わっているかと言うと、イー・エス・ディー、持続可能な社会づくりのための教育、持続可能な開発のための教育という言葉なのですけれども、要は地球が危ないというよりは、人類が危ないというのが今の地球環境問題だと思うのですけれども、地球環境の中で人間が持続的に生きていくためには、プラスチックが発展というか、よりよい生活をしていくためにはどういうふうにしていったらいいのかを考えるための教育というふうに言われて、ただ単に自然のことを知ればいいのか、そういうことだけではなくて、人間と人間の関わり、それから女性問題もそうですし、人権問題もそうです。そういった地球環境規模で考えると、環境の分野だけではなくて、どういう生き方をしたらいいのかというのを考えていかないと、人類はもうこの地球の中では生きていけないと、それは日本だけではなくて、世界中の視点で考えてみると、まさに世界中の視点で考えれば、女性の読み書きが低いことによって子どもの教育がなかなかうまくいかないだとか、そういうことがあります。そういうところまでを含めて、環境問題というのは考えていかなければいけない時代になっています。

その中で私がやっているのは、本当に一部の自然体験型の活動なのです。やはり人類が持続的にこれからもやっていきたいじゃないですか、私たちの世代で人類が終わりになってしまうのは寂しいじゃないですか、そのためには一人一人が自分の身近なところを見詰めていく必要があると思うのです。先ほど外国の事例の話がありましたけれども、アメリカでやっていることが日本で通じないという話をしました。北極でやっていることが、アフリカの国

で通じるわけがありません。それはその地域地域によって環境が違うからです。風土が違うからです。その風土風土に合った、地域地域に合った教育、学びというのを考えていかなければ、今、地球環境問題を勉強しようというので一斉に講義をしても通じないわけです。住んでいるところが違うから、住んでいる文化が違うから、今まで受けていた教育が違うからです。だから、今ここで大切なのは、それぞれの地域でそれぞれの持っている自然を使って勉強していく、関わっていく、その地域の中でどうやって次につながっていく、次世代と一緒に暮らしていけるかというのを考えるのが大切だと思うのです。その中で自然体験型の活動、この信濃川、河川流域、中越、新潟県の自然を使った活動というのがすごく大切だと思っています。東京では東京の活動があるし、沖縄では沖縄の活動があります。北海道は北海道の活動があります。新潟でも新潟ならではの活動をしていかななくてはいけないと思っています。

その中の一つで、私が今とても興味を持ってやっているのが森の幼稚園という活動です。小学校からだとは総合的な学習の時間とか、色々子ども向けの小学生、中学生、高校生向けの色々な活動があるのですが、実は私は幼児期というのはすごく大切だと思っています。今、子どもは少子化で少ないので、小学生になると子どもはすごく忙しくなってしまうのです。スポーツもしなくてはいけないし、学校行事もやらなければいけないし、地域行事にも参加しないと担い手がなくなってしまうというので、小学生になると子どもたちはすごく忙しいのです。小学校に入る前、低学年も入るのですが、その子どもに原体験という言葉を使いますが、要は昔どういうふうな遊びをしたかというのは、ずっと 50 才、60 才になっても覚えていることなのです。いかにその時代に自分の生まれ育ったふるさとの自然と関わって、そこでのいい思い出、いい学びができるかというのは、その子どもの人生に関わると思うのです。今、もう少しで 2007 年問題と言われてはいますが、団塊の世代が定年退職して、もしかしたらたくさんの方が新潟に戻ってくるかもしれないと言われています。それはなぜかと言うと、今のその方たちが昭和 20 年、30 年代、新潟でいい思い出がたくさんあるからだと思うのです。それと同じように私たちは今の子どもたちに原体験、覚えているか覚えていないか分からないけれども、その温かい思い出をたくさん残してあげなければいけないと思っています。

先ほど先生が言われたように、環境教育というのは実はすごくお節介な活動で、そんなのはつい 30 年前までは各家庭、各集落でやられていたことなのです。今、地域のコミュニティの問題が変化して、各家庭でそういったことが行われづらくなってきている、していないとは言いません、しづらくなっている現実があります。田んぼの活動にしても、今、うちの連れ合いの実家でも稲作をやっているのですが、子どもを連れて手伝いに行けないのです。何でかと言うと、機械化されているので危ないから近寄るなど、稲刈りも初めは入り口の部分を刈ったりするので、他はコンバインなので子どもが手を出すと大事故ですから、危ないから来てくれるなという話になってしまうことが多いのです。でも、私は新潟で育った子どもには田植えと草刈りと稲刈りと、田んぼの泥の“ぐちゅぐちゅ”と、そこ

に足を踏み入るとサンショウウオが浮き出てきて、カエルを追いかけて、トラクターの後ろをうちの子はよく歩いて、あいつはサギでないかと思うのですけれども、要はかかされるとカエルとか色々出てくるのです。それがおもしろくて子どもは後を追いかけるのです。それは昔はきっと鳥がついばんでいたのです。そういった経験を今はわざわざやらないと。手で田植えはしませんから、それがやはり田植えだけではなくて、田んぼに行って田均しのところから始まって田植えをして、田植え体験というのも今色々な体験学習の場面でやられていても、なかなかうまくいかないものです。その田植えというのは農家の手伝いという意味での田植えではありません。お遊びです。ですけれども、稲はすごいです。子どもが植えたものでも、倒れるのもありますが、生き残っているのもいて、今年は一俵ちょっとの収穫になりました。それをわざわざ手でやります。田植えというのはただの口実であって、田植えをしながら足下から浮き出てくる生き物を捕まえる。捕まえながら稲を倒したりもしているのですけれども、そういった体験、それから、夏の田で稲の花が咲きます。その花を見してみる。その横では今は減反なので、そばの花が咲いています。そばの花というのもきれいです。じゅうたんのよう真っ白で、そばの花もよく見ると、おしべとめしべの高さが違ったりするのです。そういったものをルーペで覗いたりとか、田んぼの活動、田植えだけではなくて、田んぼに行くことによって学べるものがたくさんあると思うのです。ですから、子どもたちが田んぼの手伝いをしなくなったことで学べなくなったことというのは、田植えの体験だけでないのです。そこで出会えた生き物とも出会えなくなっているし、そこで見られた風景にも出会えなくなっているし、そこで観察できたものも見れなくなっているし、そこで本当だったら得られるべき家族との絆も得られなくなっている。ですから、作業がなくなったことによって、実は環境教育の大切な学びである色々なつながりが、今は学べなくなっている。なので、当たり前のことをやって、わざわざやっているのが私のやっている今の環境教育です。

(豊 口): 今、伺ってまして、私たちが育った小学校時代というのは、学校に田んぼがあったのです。授業の合間というか、時間割に組んであったと思うのですけれども、そこで田植えをさせられた。それから、学校に池がありまして、その池で魚釣りを釣っていた。そういうふうに学校の周辺に池があり、田んぼがあり、もっと極端な言い方をしますと、畑を耕してかぼちゃを作ると、穴を掘って穴の中に自分たちが出した汚物を樽に入れて運んできて、そこに汚物を入れまして、はねてくっつくのですけれども、それはしょうがないです。それで入れて蓋をして種を蒔いて、しばらくすると、そこから芽が出てくる。なった実は、一つは自分で持って帰ってよろしい、あとは学校においておけと言われてと、そういう経験をずっとしていた。そういうことが小学校のカリキュラムの中に全部入っていたのです。ところが、今はそういうのがないのです。

(河 合): 今は総合的な学習の時間というのができましたので、小学校5年生でしょうか、田植えはどこの学校でも、特に新潟の中越地区であるとやられていることが多いのです。

(豊 口): そこが非常にキーワードだと思うのです。新潟ならできるのです。都会はできないのです。

(河 合) : 新潟と東京の違いということで、東京でも実は横浜あたりでも田植えのプログラムをやられているのですけれども、バケツ稲というやつです。ご存じですか。

(豊 口) : バケツに稲を植えても意味がないのです。住まいの問題ですから、色々あまり言えませんけれども、本当に自然そのものの生活の中に人間が溶け込んで作業するというこの意味は、バケツに稲を植えたのでは経験できないです。その辺で、人間というのは地球環境の中で生きてきた動物ですから、そういう人間以外の生物、生命とのふれあいというのが、さっき関係だとおっしゃったけれども、その関係が重要なのです。だから、人間は命の大切さとか生命の尊さというのは、その関係の中から初めて分かるわけです。だけど、まったく違ったところにそれがあると、これは感性というか、そういう中に入ってこない怖さがあります。さっき私が申し上げたように、都庁ができた時にたまたま会議がありまして、都庁舎で会議をやったのです。会議がちょうど5時に終わりましたから、上へ行って展望台から夕日をご覧くださいと言うので夕日を見に行っただけです。そうしたら、ちゃんとした展望台があるので。ちょうど夕日が中央線の西、鷹尾の方へ沈んでいくのです。私は見て驚いたのです。今少しは空気がよくなっているかもしれませんが、その当時、都庁ができた頃ですけれども、溶鉱炉の中に太陽が入っていくような、どす黒いのです。空気が汚れているな、まいったなと思いながら見ていましたら、そばに子どもを連れてお母さんがいまして、どう見ても小学校の低学年です。「〇〇ちゃん見てごらん、夕焼けがきれいでしょ」、子どもは何も言わないです。しばらくしたら、「母さん今日の夕日、あんな色をしているのか分かる？ あれは空気が汚染されて何とかppmだからだよ」と。小学生の低学年ですよ、僕は“夕焼けこやけ”の歌でも歌うのかと思ったら、「〇〇ちゃん、そんなことまでよく知っているの、お母さんうれしいわ」と言ったのです。これと自然環境との問題というのは、大変な問題提起をしているわけです。おそらくその子は偏差値が高くて、どこかの大学へ行くかもしれませんが、その人間が大人になった時にいったいどうなるのか、ここに現代社会の日本の問題点が隠されているような気がするのです。だから、東京の子どもたちに形式的に自然はこうだよとか、環境がこうだということを言葉や単なる一つの現象だけで教え込んでいくところ、また問題が起きてくるのではないかと。そこで、これはもっと本格的に取り組んでいくということになると大変なことになるわけですが、だったら、自然環境を理解できる、また自分の身をもって体験した人間が将来、こうあるべきだと言えるような人材育成をしなければいけない。それができるのが、この信濃川の流域だと思うのです。私は東京に60年いましたから分かるのですけれども、60才で長岡に来て、新潟県をずっと歩き回って信濃川の水に触れ、空気に触れ、そしておいしいお酒を飲み、お米を食べた時に、これからの地球環境を救うのは新潟県の信濃川、日本一の大河の信濃川から初めてそういう人材が生まれてくるのだという確証を自分自身で持ったわけです。それから非常に信濃川が好きになって、あちこち歩いているわけですが、ここで本当にいい体験ができる、実際にいいことを教えられる、教えなくても子どもたちはちゃんと理解する。だったら、今の教育制度を変えなければいけない。いい子は川で遊ばないということは、新潟県では言わない。

いい子は川でどんどん遊ぶとか言わなければいけないのですけれども、いかに川が危険かということも、子どもは自分の身体で知ればいいのです。友達がおぼれたのを助ければ、いかに川が怖いかということが分かります。そういう経験で川と人間の関係が分かってくるわけです。だから、新潟県のこれからの将来の4月1日以降の小学校の教育では、いい子は川で遊ぶということを是非、入れてもらいたいと思っているのですけれども、これは個人的なことですけれども、どうでしょうか。

(河合) :安全というのはすごく大切な部分ではあるのです。なぜ今、いい子は川で遊ばなくなってしまったのか、遊ばないということになってしまったのか、川の流れというのが昔は大人が毎日のように川にアユ釣りに行ったり、川に接した生活をしていて、どこの川が危険であるかというのを大人が熟知していたわけです。その熟知している大人を見て子どもたちも学んでいたと思うのです。今、私たち大人の生活は、川に行くことはあまりないです。魚野川はアユ釣りで夏になるとたくさんの人が入っていますけれども、私たち大人の生活が川と離れてしまって、川に行ってしまうと分からないことが多いから行ってはいけないのだと、何が危ないか大人が教えられなくなっているのではないかと思うのです。そこで、お節介な環境教育という言葉の中で言うと、川で遊べるような情報を私たち大人が調べていきます。実際、川には淵だとか瀬だとか、事故が起こりやすいところはあるのです。ただ、そういうのが起きにくい場所というのもあって、遊びやすい場所というのは、昔の子どもたちは知っていた。先生がさっき川でおぼれそうだったけれども、実はおぼれなかったというのは、ちゃんとおぼれない場所を上級生が渡っていったからだと思うのです。本当におぼれるところだったら、今の豊口先生はいらっしゃらない。だけど、ちゃんと笑って見ていただけるだけの余裕が上級生にあった。というのは、その川を上級生が知っていたからだと思うのです。私たちは今、川のことをどこまで分かっているのか、私たちが川でプログラムをやる時は下見を当然します。でも、川は毎日流れているし、上流に雷雲が発生すれば、川には近づけません。そういったことを昔の人は経験値で知っていたわけです。何となく行かないのは、ちゃんと理由があったのです。

今、私たちが環境教育でプログラムをやる時は、そういったことが逆にマニュアルになっています。何でかと言うと、経験値がないからです。ですから、どういう場面が危険であって、どういう場面の時にはどういうことに気を付けましょうというのが、残念ながら今はマニュアルになっているわけです。私たちもそういうマニュアルを見て、それで行動します。それは安全の管理をするためです。昔の人たちはそれが感性というか、当たり前のように分かっていたわけです。それは何でかと言うと、毎日川を見て、空を見て生活をしていたからだと思うのです。その時代と今が変わってしまった、変わってしまったからこそ教育の方法というのも変わってしまったのだと思うのです。ですから、私たちは昔のように川に行きたいのだけれども、その前に変わってしまったものがあるから、変えなくてはいけないやり方というものもあるのだらうと思っています。ただ、その変わった部分を分かれば、昔のように川は遊べると思うのです。遊べることによって、先生が先ほどおっしゃった pH(ペ

一八) の子ども、すごい知識ですよ。今の子は地球環境問題を本当によく知っています。テレビとかでも私たち大人だとなかなか覚えられないことでも子どもは1回で覚えますし、色々な場面で環境の問題を勉強しています。ただ、怖いのは、それと自分が結びついていないこと、それと、生き物として美しいと感じる、美しいだけでなく危険であったりとか、驚きであったりしてもいいと思うのですけれども、そこの感性が変わってしまっていることが怖いのだらうと思います。川遊びというのは一つのきっかけだと思うのです。川遊びですべてが変わるとは思わないのですけれども、川という自然に触れることによって、この川の水はどこからきたのだらうということを考えたり、今雪が降っていますが、たくさんの雪で皆さんも難儀なこともたくさんあると思いますが、私は雪を見ていて、これはアメリカ人の小説、「ひとひらの雪」を思い出します。スノーフレークというお話です。ひとひらの雪が降ってきて、川に流れて海に行って、そしてまた海で蒸発して昇天して雲になってという流れのお話があるのです。もし川遊びをして、そういう一片の雪を感じられる感性が生まれることができれば、きっとその感性は地球環境を変えるのではないかと思います。先生はデザインの分野をやられていますけれども、多分デザインの分野でも、感性というのはすごく必要なことだと思うのですけれども。

(豊 口): 今、ご質問があったのでお答えしますが、感性という言葉はわりに新しい言葉なのです。昔はあまり使わなかったのです。これはかつての通産省が情報社会から高度情報社会に変わってきて、次は感性社会だと言ったのです。感性という言葉が英語にあるかと思って調べたら、ないのです。不思議な言葉だと思って私も困ったのですが、感性社会とはいったい何かと、要するに豊かな情念がどうのこうのと言うのですけれども、感性というのは美しいものを見た時に、素直に美しいと思える気持ちを持っていることが感性なのです。非常に汚いものを見た時に、これは汚いと素直に自分自身が受け止めて、その汚いというものをきれいにする次の行動に出るとというのが感性豊かな人間なのです。これは教養と同じように、教養という字を引いたから自分が教養のついた人間になるということではなくて、小さい頃から育ってきた歴史の中に感性というのが育まれてくる。さっき私が申し上げましたが、芋虫を割り箸でつまんで突っ込むと、これは単に芋虫を殺すということだけですけれども、それが紋白蝶に変わって飛んでいった時にきれいだなと、こんなに美しい蝶々になるのだと、やがてその蝶々が死んで地べたに落ちていると、蝶々というのはこんなに早く死んじゃうのだなと。今度は春になっておたまじゃくしを池に見に行ったら、グジュグジュの玉があるのです。それがやがておたまじゃくしになって、手足が切れてしっぽがなくなって、陸に上がってカエルになっている。おたまじゃくしはカエルになるのだというのが分かる。それから、例えば水の中からヤゴが出てきて、ガンダムみたいなすごいのが出てきます。まさかあれがトンボになるとは思わないで見てみると、背中が割れてトンボになって飛んでいった、すばらしい生命の誕生を見る。小学校の時に習ったのですけれども、蟬が7年間地中にいて1週間しか生きていないと言われて、飛んで行って、やがてポタッと落ちてくる。特にアブラゼミはすぐ落ちてくるのですけれども、そういう状態を毎年、繰り返し繰り返し目の当たりにしな

から命の美しさとか尊さとか、生きることのすばらしさを経験しながら豊かになっていくのが感性なのです。だから、本当に美しいものを見た時には、本当に美しいと感動して、その中に自分自身がひたることができる、これが感性なのです。だから、本当に美しいものを理解できる人間というのは、毎年毎年の自然の営みの中から自分自身のものに関する情念をつかみだすことができる人間、これが感性なのです。

ところが、さっき申し上げたように、私は東京の子どもたちを見ていて、ここで感性という言葉をいくら学校で教えても身に付かないと思うのです。競争社会であって、すべて数字で理解していく。1 + 1 は2だという数字で、こうやれば儲かるのだということだけで人生を送っていくような子どもたちが育っている状況を見てみると、日本の社会での感性というのは既に失われていると思ったのですけれども、再度繰り返しますけれども、新潟に12年前に来て、あの信濃川の土手に立った時に、こんなすばらしい世界が日本にあったのだと、ここだったら、世界に通用する人間が教育できる、造形大学というのはデザインの専門大学ですけれども、デザインの専門大学をなぜ長岡に作るようになったのか、これは市長が決めたことでもないし、日本の政府が決めたことでもない。将来の地球を考えて神がここに造れと言ったのだと、天命だと思ったのです。ここなら、そういう人間が教育できる、本当に感性豊かな、何が一番美しいかということが理解できる人材育成できるのだと、私は信濃川の土手で自信を持ったのです。それで、デザインの専門大学、これは世界で長岡にしかありません。世界でただ一つです。このデザインの専門大学のカリキュラムの教育の基本は何かと考えた時に、32個ハードルを越えないと大学は許可にならないのです。その基本的なカリキュラムの根底に持っていったのが自然科学と社会科学と人文科学、この三つの重なり合ったところに、実はデザインというものが存在する。これはデザインの哲学です。それは人間というものと重なるわけです。ですから、人文科学、自然科学、社会科学というものをどういう関わり合いを持ってデザインの軸を作っていくか、その時に具体的な大学院での教育のカリキュラムを考えた。その三つの柱の中に、ある三つのキーワードになる学問は何か。一つは人間行動学、人間がある現象を見た時に、その人間がどういう心理状態になって次の行動に出るか、これを研究しよう。それから環境情報学、地球というものにはかなりたくさんの無数に近い生命体が存在している。その生命体が共存共栄していく状況の中で、どういう情報交換が必要なのか。例えば火山が爆発する、川が氾濫する、地球の今までの歴史の中で色々な現象が起こった、その情報をどう伝えるか、これを学問的体系づくりをして構築しないと、将来の都市計画やまちづくりはできないだろうと、これも必要だと。もう一つは造形材料学です。人類が作ってきた道具、これは土であり、鉄であり、銅であり、そういう自然素材を自分たちの力でもってある具体的な形に置き換えて、それを使ってきたと、それはまた自然に帰る。要するにものを作る材料とはいったい何なのかという原点にかえて造形材料学をやる必要があるだろうということで、この三つの学問を大学院を柱にしてカリキュラムを組んだのです。

ところが、この三つの学問をやっている研究者は一人もいなかった。まだいないのです。

だけど将来、そういう人間をこの大学からスタートさせたいということのをベースにして、カリキュラムを6年制の大学として下へ下ろしてきたのです。だから、マスターで研究する内容を中心にして、学部までカリキュラムを下ろしてきたのです。一般教養科目は入らない、124単位。入らないということは、一般教育科目はいらないだろうと、全部外して担当事務官と一緒に文部省に出そうと言ったら、学長は絶対通らない、そんな無謀なことをして文部省が許可するわけがない、設置基準はこうなっていますと。それは下から組上げたからそうなるのだろうと、僕は大学院で何をやるかという、将来6年制の大学としての大学のあり方を考えた時に、上からカリキュラムを下ろしてきたら一般教養は入らないのだと、入らなければ要らないのだと、アメリカのシステムだろうということを出したら通ったのです。ですから、今の長岡造形大学には、従来の大学の一般教養科目はないのです。ただし、専門家としての教育が多く入っている。ですから、体育の実習の授業はありません、第2外国語というの也没有。なぜそうしたかと言うと、さっき申し上げたように、将来の地球環境を踏まえた国際人を育てるためには、絶対にここしかないのだという信念、これは天命です。神が与えてくれたのだろうという使命感で今やっています、さっきおっしゃったように、感性というのを私は信濃川のほとりで、初めて新しい21世紀から次の世紀にわたっていく人間の感性教育ができるだろうと思っているわけです。夢ですけども。

(河合)：今の感性のお話で思い出したのですけれども、環境教育「ザ・センス・オブ・ワンダー」という言葉があるのです。それは自然の不思議さに目を見張る感性という訳をするのですけれども、これはレイチェル・カーソンさんというアメリカの女性海洋生物学者で、「沈黙の春」という本も書いた人です。沈黙の春というのは、「サイレント・スプリング」という原題です。要は複合汚染、農薬の問題等を1960年代に警告した本なのです。ある春、本来ならば鳥のさえずりで賑やかな春なのに沈黙の春が訪れたという、生態系が崩れていった描写の一節で始まる本を書いた女性が、最後、出版を待たずに亡くなるくらいの晩年に書いた本が、「ザ・センス・オブ・ワンダー」という本です。自然に目を見張る感性は先ほどのデザインにも通じると思うのです。これって何てすばらしいのだろう、素敵だとか怖いとか、そういった感性をどういうふうに私たちは育てていったらいいのだろう、それから、この環境が今ちょっとおかしいのではないとか、pHは分からないけれども、何かちょっと居心地が悪いとか、今、何でこんなに環境問題のことが話されるかと言うと、みんながそこに居心地の悪さを感じているからだと思うのです。何か変だぞ、毎日過ごしているけれども何か変だぞと、雪が何でこんなにいっぱい降るのだろう、何で水害があんなになったのだろう、ここ20年はなかった、何か変だ、変だというところが、今、環境問題がクローズアップされているベースのところに、みんながそれを感じているからそういう報道が多くなされ、そういうふうな動きがあると思うのです。その変だと思う感性が感じなくなってしまった時が、やはり人類が危ないのではないかなと。大学教育とかの教育で、そういった感性を持っている人間が学ぶから、そういった動きができる。

じゃあ、その感性を育てるためにはどうしたらいいのだろうということのをその本は一つの

示唆として書いてあります。それは子どもたちへのメッセージ、子供を持つ親へのメッセージとして書かれているのです。「センス・オブ・ワンダー」というのは、自然に目を見張る感性というのは、子どもたちの何気ない発見から起こる、その何気ない発見を子どもたちと一緒に自然の中に出ていくなんて私はできません、親も教育者も言う。でも、その子どもたちと一緒に驚いてあげる、共感できる大人がそこに一人いるだけで、その子の感性は広がって育てられていくという話なのです。感じることは、教えることの半分も重要ではないという言葉が出ています。私もよく子どもと一緒に散歩をしていました。分からないことをたくさん聞かれます。「これは何、これは何」と。でも、「これはおもしろいね、すごいね」と一緒に感じてあげることで、例えばタンポポ一つ見ただけでも、その花と一緒に見て摘んであげることで、この花が西洋タンポポなのか日本タンポポなのか、関東タンポポなのか、そのことを知らなくても子どもの感性は育てられるのです。逆に、「それはただの西洋タンポポよ、外来種ね」と言ってみないでしまう。環境教育には、もしかしたら西洋タンポポと日本タンポポの違いというのは必要かもしれません。だけでも、小さな子どもと子どもの感性を育てるためには、そこでそのセリフを言うのではなくて、一緒にしゃがみ込んであげる大人の行動こそが子どもの感性を広げることだと思うのです。環境教育は誰でもできると思うのです。おじいちゃん、おばあちゃんでも、反対においじいちゃん、おばあちゃんだからこそできることなのではないかと思うのです。その子の目線に立って、一緒にその不思議さを味わって体験することで、それが学びになる。それで、その子がもしこのタンポポとこのタンポポは違うけれども、どう違うのだろうと思って図鑑で調べたことは、本当の学びになるのです。ですけれども、それは西洋タンポポよと言ったことについては、その子はもうタンポポを見ないで終わってしまうわけです。今は簡単なお話だったのですけれども、そういうことというのは生活の中、色々な場面でたくさんあると思うのです。

環境教育の一番ベースになっているところは、周りにいる大人がいかにか子どもの不思議さに目を見張る感性と付き合っているかです。手間がかかります、この忙しい現代において。ですけれども、そこで付き合っていることによって、実は大人も学びがあると思うのです。おばあちゃんが子守をしていると元気になるというのがありますが、それは子どものエネルギーをもらっているからだと思うのです。私はこのセンス・オブ・ワンダー、ワンダーというのは不思議ということなのですけれども、おもしろいことを聞きました。ワンダー、不思議がたくさんあると、ワンダフル、すばらしいということになるというのです。環境教育をやっている、私もこれは何ですかと分からないことを聞かれることがたくさんあるのです。分からないと指導者としてはまずいのではないかと思って、ぎくっとしたりするのですけれども、それは学校の先生とか、そういう立場の方もそうだと思うのですが、実は不思議なことがたくさんある方がすばらしいのだろうなど、分からないから一緒に調べましようねという言葉が発せられたり、分からないものを見つけて、すごいねという言葉になったり、地球上には分からないことがたくさんあるわけです。今、地球上で分かっている生き物というのは、地球上にいる生き物のうちの半分もいないのではないかとと言われて、分からないことの

方が本当は多いのに、分かったような気になっている、しかも、自分が調べて分かったのではなくて、本を見たり誰かが調べたから分かったような気になっているのです。分からないことの方がすごく多いのです。分からないことを分からないから一緒に調べようねと言ってあげられる感性、それから分からないことを見つけられて、すごいねとその子を褒めてあげること、そういったことは自然の多いところの方がやりやすいと思います。私は出身が東京なので、東京にも友達がいて、同じ時代に子育てをしているのですけれども、公園に今日遊びに行って、散歩してねという話をすると、ちょっと噛み合わないです。何でだろうと。さっきタンポポの話が出ましたけれども、子どもと一緒にタンポポを見て、公園へ行ってねと。東京だと、公園で落ちているものは拾ってはいけません。例えば浮浪者が捨てたものだったりとか毒物だったりとか、そういったことの方が多いです。新潟県内、中越地区で散歩していて、子どもが野の花を摘んだくらいだったら、多分あまり目くじらを立てないですよ。それを楽しむ余裕が新潟の自然にはある、そして、なおかつ新潟の人間にもそういう余裕がある、そういったところから教育が生まれる、そういった教育がなされる土地から新しい感性を持った人間、新しい教育を行っていける、それというのが、やはり環境教育につながっていくと思うのです。

(豊 口) : ありがとうございます。会場の関係でハウリングがあって、聞こえにくいと思いますけれども、ご容赦ください。

ということで、子どもと親との関係の中から環境教育というのが非常に具体的になるということを示唆していただきました。

もう一つ、今、日本の教育の中で問題になってきているのが、試験に出るから覚えておけという教育なのです。これは小学校でも中学校でもそうです。高校もそうです。自分で考えてごらんという教育はしていません。だけど、神様が考えるという特権を人間にだけ与えてくれたのです。生きているものの中で考えることのできるのは人間だけなのです。その人間から考えるという要素を外すような教育を日本の社会でやっているとすれば、これは大変なことになるのです。だから、覚えておけというのは確かに必要かもしれないけれども、考えてごらん、考えろと。実は、またデザインの話に入りますけれども、デザインというのは考えるのです。人がやったことを真似して、そのとおりにやったのではデザインにはならないのです。誰もやらないことを自分の力で構築して行って提案するのがデザインなのです。企画・計画から具体的なものに入る、だから考えなくてはならない。考える能力のない人間は、デザイナーにはなれないということになるわけです。そういう点からいくと、地球環境というのは一つの自分たちに与えられた同じ環境ですけれども、地域によって歴史的な観点も違うし、文化も違うのですけれども、そういう中でお互いに考える能力を持った人間同士が手をつなぎ合った的に、すばらしい地球環境に対するプロジェクトが具体的にあっていくだろうという気がするのです。

実はこの間、名古屋で愛・地球博というのがありました。あれはテーマとして環境問題です。第1種の万博でテーマを決めるということは、まずありえないことです。6か月やる1

種の万博というのはテーマがないのです。だけど、なぜかあれは愛・地球博と環境問題を取り上げました。大阪で万博があったのは1970年、昭和45年です。この時は日本の企業が、企業単独で19社出店しています。それから1985年につくばで科学技術博覧会、これは第2種ですからテーマがあつていいのです。ここには日本の企業が21社参加しているのです。愛知県の地球博に日本の企業は何社参加していたでしょうか、2社です。トヨタと日立です。あとの企業は参加していないのです。地球環境問題といいながら、なぜ日本の企業は2社しか参加しなかったか。このことは真剣になって考える必要があると思うのです。それは、基本的に環境問題を取り上げていながら、会場を造る時に地球の表面を全部削り取った、これがまず第1点です。あれだけの木を伐って、地面を平らにして、従来どおりの仮設のパビリオンを造って来場者を導入した。これは新しい提案は、会場構成には何もない、全く過去の遺産としての万博会場を造ったに過ぎないということに対して基本的な会場構成に対するアンチの姿勢があつて、企業が参加しなかったのではないかということが一つあります。私があそこで提案したのは、あそこの会場の地下に巨大な洞穴があるのです。たまたま私も大阪万博、つくば博も関係していましたので、あるところから電話がかかってくる、豊口さん、愛知博どうですかと言うから、条件が一つあると。僕は地球の表面、木を伐らない、土は削らない、洞穴を使って新しい万博をやるのだったら参加すると、そんな非常識なことを考える人はいないと、それっきり電話がかかってくるのでした。そのぐらいの提案をすると意味があつたかもしれない。やはり環境問題を取り上げていながら、その後、実はテレビでも新聞でも専門の雑誌でも、あまり具体的な情報が一般の人にきていません。世界からの注目度も非常に希薄であつた。これは何かと言うと、環境問題に対して本当の核心をついた博覧会ではなかつたと、そういうずれが私はあつたような気がするのです。しかも、あそこはバザールみたいに世界中のおみやげ屋さんが並んでいましたけれども、あれはバザール博でバザールであつて、博覧会でないという気がするのです。ちょっと過去に戻りますけれども、1985年に日本がやったつくばの科学技術博覧会、これこそが環境博であつたのではないかという気がするのです。

なぜこんなことを申し上げるかと言いますと、あのつくば博の時に、第2種ですけれども、9つのテーマがあつたのです。一つはエネルギー問題です。今、地球上では盛んにエネルギーがどんどんたくさん使われるようになった。それで、エネルギー問題というのは地球規模の問題だと、さらには原子力発電所が今はたくさん造られているけれども、これは決して安心・安全なエネルギー源を作るシステムではないということをおの時、日本の政府が言っていたのです。ただし、日本の原子力発電所は安心・安全である、大丈夫だと。だけど、もっと安心・安全なエネルギー源を私たち人類のために作ろうではないかということで、太陽エネルギーの問題がそこで提案されてきました。だから、あの会場全体の電気は太陽電池で集めて活用していました。

それからメディカルサイエンス、要するに医療の問題。地球にはまだ風土病が残っている、そういう風土病を地球規模で研究しようじゃないかという提案をしている。その風土病とい

うのは、いったいどういう環境から出てくるのかということを経済上のあらゆる知恵を集めて、説明していこうという提案をしていたのです。

それからバイオテクノロジーの提案もしていました。2,000個になったトマトが1本立っていました。別に2,000個になったからと珍しいのではなくて、聞いてみると、色々なことができる、遺伝子の配合だと。遺伝子の問題については地球規模で考えようと、特定のところが考えたのでは危険だということで、共通・共同のテーマとして考えていこうではないかと。ヒトゲノムの解明がその後出たわけですがけれども、そういうものを1社の人材が力を持って牛耳ったのでは大変なことになる、それを考えていこうと。それからコミュニケーション、情報通信の問題、色々な問題が9つありました。

最後には地球・宇宙の問題で、実は宇宙探査衛星が70年代に打ち上げられて、15年かかって85年に太陽系の最後の指名を受けた星までいったのです。十数年かかっているのです。秒速40キロです。秒速40キロで十数年かかって最後の星まで行って、情報を送ってきたのです。私はどこか太陽系の星に生命が存在するだろうという期待を受けて調査に来たけれども、ついに発見できませんでした。「地球の皆さん、生命が存在するのは地球だけです。この美しい地球を大切にしてください」と言って彼女は太陽系の外に飛んでいった、もう二度と帰って来ない。ガモフの理論でいくと2億5000年ぐらい後には帰ってくるかもしれませんが、そうやって飛んでいった。そういうことをつくば科学技術博覧会では、世界に日本の国がメッセージとして送ったのです。カナダのジャーナリストは、私の友人ですがけれども、手紙を送ったので見に来ましたけれども、あれは科学技術博覧会ではない、地球の将来を考えた、地球全体の環境を考えた、地球の将来をデザインしたデザイン博だと思いうことを手紙に書いてくれましたけれども、そういうふうに使っていた。あの中で出た様々な提案は、すばらしかったと思うのです。

例えばバイオの問題については、ヒトゲノムの問題が提案されたし、情報通信に関しては、安全・安全な情報をどうするかと言っているうちに、89年にベルリンの壁がなくなった。それから、アメリカのサイエンスにしてみれば、85年に提案したものが、その後、エイズの問題が出てきて、それを解明した。それから原子力発電所の問題についても、89年にチェルノブイリが爆発した。みんな数年後に問題が露呈されたわけですが。これを日本の政府が知っていたと私は思う。知っていて、9つのテーマを日本からメッセージとして送ったのだろうという気がするのです。ですから、環境問題については、日本は既に89年に世界にメッセージを送っている。その中で集約されて残ったのがエネルギー問題と水の問題とコミュニケーションの問題、この3つが21世紀に一つの問題として投げられているわけです。エネルギーと言うと石油問題になるわけですがけれども、もう一つ、水の問題が大きな課題として出されていたということが、あの博覧会の中にあるのです。私たちはもう一度、日本がやった博覧会を考えてみる必要があると思うのですけれども、既に環境問題はボールが投げられていた。その後の世界の動きをずっと見ると、色々な問題が露呈してきているという気がするのです。この辺で新しい人材を育成して、将来どういう地球環境を整備していくか、何か

夢をお話しいただきたいのですけれども。

(河合) : やはり環境問題というのは、暗いメッセージというのはたくさんあると思うのです。エネルギーのことについてもそうですし、一番の地球環境の汚染は戦争だと言われていています。そういうこと含めて、暗いメッセージはたくさん見聞きして、それは事実なのです。事実なのですけれども、それだけを見ていると、私たちは生きていくのが辛くなってしまふところがあると思うのです。でも、もう一つ違う見方をしてみると、私たちはこんなにまだ豊かで、自然に恵まれた、そしてその自然を生かす文化を、今ちょっと途切れている部分もあると思うのですけれども、まだ自然豊かな文化を生活の中に取り入れて生きている人たちがいるわけです。そういう世代の人たちがいるわけです。その文化をまだ私たちは受け継ぎます。そういった自然の豊かさで私たちはずっと縄文以来、この信濃川流域で生きてきたわけです。その生きてきた文化というすばらしいものを私たちは受け継いでいかななくてはいけない、厳しい現実はあるけれども、今ここで生きている私たちがいるというのはやはりすばらしいことで、それを次につなげていくために前向きにいかなくてはいけない。その前向きに生きるためのエネルギーは何かと言ったら、この自然の美しさであり、子どもたちとの関わりではないのかなど。少子化が今問題になっている一番のところは、年金が将来難しくなるから少子化を解消しようというのも一説にはあると思うのですけれども、それはちょっとあまりにも現実的すぎて、やっぱり少子化で一番問題だと私が思うのは、子どもの未来を考えるきっかけがなくなってしまう、今の大人だけで世界をやっぺいこうとすると、暗いことしか考えられなくなってしまうのではないかなど、子どもたちの違うエネルギー、違う時代を見ることによって、この子たちに何かを残してあげたい、この子たちにも伝えてあげたいものがあると思うことで大人もエネルギーを得られる、その伝える相手がいなくなることが、少子化の一番の問題ではないかと思うのです。そういった次につながるエネルギーを向けるためには、今の環境を良くして、今よりも私たちは悪いものを子どもたちに残さないようにしたいじゃないですか。私たちはずっと縄文以来、こういった自然を祖先から受け継いできたわけです。私たちが楽をしたいから全部使いました、ごめんなさい、あなたたちは暗いけどやっていってよというのでは大人としてあまりにも無責任だし、そういうふうな投げやりな態度ではいけないのではないかと思うのです。投げやりにならないためのエネルギーは何からもらうかと言うと、やはり自然の恵みからもらうのだと思うのです。

先ほど環境教育というのは持続可能な開発のための教育、持続可能な社会を作るためだということを言いました。それというのは、自分が前向きに生きていくためのエネルギーを次につなげるためのもので、そのために暗いことを義務感でやるというよりは楽しいこと、すばらしいことをワンダフル、すばらしいことを自分たちの中で見つけていって取り入れて、それをより広げて次に伝えることが環境教育だと思うのです。環境教育は特別な人が特別なことをやることではないと思うのです。誰もがすばらしいと思うものを身近なところで見つけて、自分の伝えたいと思う人、それがお子さんであってもいいし、お孫さんであってもいいし、地域の子どもたちであってもいいと思うのですけれども、目に見える人にそれを伝え

ていく、そういった努力、それから目に見える川、川が汚れていて気持ちが悪いと思ったら、ごみを拾うというのは、アースコンシャスだから拾うだけではないと思うのです。そこにならぬ方がいいと思う気持ち、ないものを使いたいと思う気持ち、雪の美しさも伝えていきたい。ただ、今、雪は中国や何かの環境問題もあります。それだったら中国の方に行って、環境のことを考えるというのも新潟の環境教育、信濃川からつながる問題だと思うのです。そうやって前向きに、暗いことは多いのですけれども、明るい方向で変えていくことでどんどん色々な人の輪が広がって、輪が広がることでどんどん新しい色々な発想が生まれて、発想が広がることで新しい研究が広がって、研究が広がることで世界が変わるかもしれません。変わるか、変わらないか、今は分からないのです。でも、今やらないと変わらないし、なげやりにならないで、今あるものを大切に、今ある人に伝えていく、そんな活動をこれからもしていきたいと思います。

(豊 口) : ありがとうございます。せっかくですので、会場の方で何かご発言、ご質問がありましたらお願いしたいと思います。いらっしゃいませんか。

(会 場) : 上越からまいりましたけれども、豪雪でやっとの思いでこちらにまいりましたが、お話をお聞きしながら、私はとんでもないことを考えていました。私はカラオケが大好きでございまして、美空ひばりの「川の流れのように」というのを色々なところで歌うのです。もう一つ、対極にあるのがテレサ・テンが歌った「時の流れに身をまかせ」で、私は何回か大学に寄せていただきまして色々な方々からお話を伺うのですけれども、今日は環境問題で、私も小学校の教員を長い間しておりまして、定年退職して7年くらいたつのですが、これは皆さん一生懸命やってくださっているのです。私も私なりに一生懸命やってきた。しかし、大事なことは、自分の問題として、私は学者ではありません、評論家でもない、偉い者でもないけれども、自分の問題としてどうそれを理解して受け取って、自分の身近な生活の中に、あるいは家庭とかコミュニティとか、色々な中で実践できるかということが、日本人に問われているのだらうと思います。やっぱり今でも日本人というのは、ちょっと閉鎖的です。私も仕事柄、海外へ行ってまいりました。色々な方々と付き合ってみて思うのは、日本人は立派なことを言うけれども、閉鎖的なのです。日本列島、島国根性というか、昔も今も変わっていないのです。

それはどういうことかと言いますと、理論的には立派なのです。環境問題、政治経済、立派なことを言っているのです。しかし、私は貧しい国の方々、あるいはそうでない方々と実際に自分の目で見て色々お話をした。日本人はおごりすぎるのではないかなと。この間の調査で中流階級の上だとか中だとか、まだ中流意識を持っている。私自身、一人の人間として思った時に、もうちょっと冷静にというか、日本人は頭がいいけれども、生活人として見た時に苦勞を知らなすぎる。一気にバブルが頂点に達した。今、日本は経済が活性化した、豊かになっているというけれども、地域を見ると、とんでもないです。決して生活は豊かでない。人間として私は貧しいと思う。日本人ほどいい加減な人種はいない。これは私の意見で、質問でも何でもないので。

(豊 口) : 非常に核心をついたようなご意見を今いただきました。確かに私たちは豊かであるという意識あると思います。今おっしゃったように、日本が非常に閉鎖的だというお話がありましたけれども、日本人はあまりにも海外へ出て行っていない、交流が少ないのです。これは島国とおっしゃったけれども、そのとおりなのです。日本人が海外へ旅行する人は多いです。だけど、本当に交流をしてくる人間がどのくらいいるかということは、極めて少ないです。これは言葉の問題もありますけれども、単なる観光旅行で帰ってくる人が多すぎる。しかも、点的旅行です。ロンドンとパリ、これはお互いの文化交流ができていない、このことは確かです。

それからもう一つは、今、河合さんもおっしゃったけれども、地球上で色々なトラブルが起こっている。アメリカというのは歴史がない国ですから、地球上の人類が作ってきた歴史はあまりよく分からないのです。だから、バクダッドというのは文明の発祥地です。ここを全部潰した。潰しても、先人に対するものはないのです。そういうふうに歴史がない国が、人類が作ってきた歴史を潰していつている実態を見た時に、その歴史を持った人間たちが、もっと先人に対して失礼のないようなことをしなければいけない。それは結果的には環境破壊につながってきているわけです。文明の発祥、これはイラクのバクダッドの町の、私たちが世界史を習うと、必ず最初にあそこが出てくる。そういうものが姿を消している、そういうことを文化・文明を含めた環境問題というのを考えていかななくてはならないだろうと。日本の場合には、恵まれすぎた歴史があることは事実なのです。自然環境も緑が、木が、山が、日本列島の80%近くが森林で覆われているわけですから美しい。水もおいしい、世界で水道の水が飲める国というのは3か国くらいしかないわけです。その水のありがたさを日本人がどのくらい分かっているか。昔、私たちが海外に仕事に行く時には、ペットボトルなんかはないのです。水が飲みたくても飲めない、中国へ行っても。そうすると、やかんで沸かして冷やして飲むのだけれども、本当に完全に沸いたお湯なのか、水なのか分かりませんから飲みにくい。てきめんにおなかこわす。ヨーロッパへ行くと硬水ですから、やかんの底に2センチも3センチも石灰がたまっているわけです。沸かして飲まないと身体に悪い。そういう状況の中で、日本は非常に水には恵まれている。このこともおっしゃるように、考えなくてはいけない基本的なことです。

また信濃川に戻るのですけれども、日本の水は軟水です。軟水でおいしいからお酒ができる。そういうことも日本人としては考えなくてはいけない。日本では水が飲めるというのは何なのか、どうしてなのかということを考えなければいけない。その中でもおいしい水が飲めるのは新潟県なのです。今、雪が降っていますが、この雪です。この雪が降らなくなったらどうということになるかと言うと、水が飲めなくなりますからすばらしい環境だと思います。すばらしい恵まれた環境の中でもう一度、恵まれない地球社会のすべての人々に対してどういうメッセージを送るのか、これが今後の環境問題の一番大きな鍵だろうと私は思います。

(河 合) : 私も一言。今おっしゃった、日本人だけではなくて、人間というものが地球の中でちょっと威張りすぎているというのはあると思うのです。人間だけで生きていけないわけです。微生

物がいて水を濾過するから、やっと信濃川に流れてきて、それを取水してお水として飲めるわけです。やはり人間が独り立ちしては人類はやっていけないのだと、人類自体が島国根性というわけではないですけれども、もう少し他のところにも目を向ける余裕を持った生き物にならないといけないのではないかと、今、お話を聞いていて思いました。

(会 場) : 今、河合先生がおっしゃったとおりです。微生物というか、目に見えないもの、それが今壊されているわけです。私は小学校の教員を 40 年近くしていました。定年退職して 6、7 年たつのですけれども、どうしてですかと言いますと、百姓をしています。2 ヘクタール足らずの田んぼを家内と耕していて、それすら潰されそうになっているのです。私はなにくそと大和魂ではないけれども、認定農業者にならなくてもいいから、先祖伝来の田んぼを耕してやっていく道を探ろうとして、今一生懸命努力しています。

それはともあれ、どういうことかと言いますと、環境とおっしゃるけれども、私も新潟県のエコ・マイスターで、退職と同時に一生懸命やっています。けれども、どういうことかと言いますと、環境を破壊しているのは誰ですか、結局、私たちなのです。私たち人類が、人間が地球環境を破壊している。自分たちの生活を破壊し、そして息苦しく生活しづらくなっていると私は思うのです。どうしてそうなったのかと言うと、例えば農業をとってみると、どういうことになりましたか。私はずっと百姓のせがれでできたけれども、近代化とか機械化の名前において基盤整備をやり、全部欧米の真似をしてきた。まず私たちのところでやったのは、3 反でやったのです。しかし、今やっているのは 1 町歩です。そして、大型機械でやる。しかし、5 反でも 3 反でも 1 町歩でも、子どもの頃はみんな仲良くやっていた。そして今はどうですか、担い手がいない。当たり前です。田んぼを破壊して機械化をやって荒らして行って、米粒一粒だっておろそかにする。そして、担い手がいないのだと言う。要するにどういうことを言いたいかと言うと、目に見えないものをおろそかにしたということです。心の問題も同じ、環境の問題も同じです。今、環境の原点は目に見えない微生物です。それをみんな化学薬品、肥料だのといって人間の環境、天候の問題、全部そこに起因すると私はみているのですが、いかがですか。

(豊 口) : 今のお話は、実は、もし人間が電子顕微鏡ぐらいの目を持っていると景色が変わるのです。例えば土はバクテリアの塊です。ということは、月夜の晩に庭を見ていると、地面が動いているのです。その生きている土を眺めて、しかもそれを見られる人間がどのくらいいるかということなのです。これをコンクリートで蓋をする、アスファルトで蓋をするとバクテリアは死にますから、土は死んでいくという。ですから、今いいご指摘をされたのですけれども、自然環境というのはバクテリアがあって初めて生きているわけですから、バクテリアの世界というのも実際に研究者がいっぱいいるわけですが、それは一般の人々の生活の中に入ってきていない。ですから、今日はそろそろ最後になりますけれども、目に見えない環境を構成している要素として、バクテリアの世界を私たちはもう一度確認しようではないかと、それによってすばらしい人間との関係、環境がうまくそこで整理されてくる時代が来るだろうというふうにさせていただきたいと、今日は私たちの目に見えない世界をもう一度発見し

よう、これは河合さんがおっしゃったように子どもの心もそうなのです。子どもの心が見えないから、家庭でおかしなことになる。お母さんの心が見えないからおかしくなる、心をお互いに見る、心が見えればそうはならないだろうと。ですから、人間同士の心もそうだし、自然環境の中で人間の力ではどうしても見えない世界があるわけですから、それをもう一度みんなで見てみましょうということで、この信濃川、特に魚野川と信濃川のこの地域、川口の地域の中から育ってきた若い人材が、将来、地球・社会に大きな貢献をしていこうとすることを期待して、今日は終わりとさせていただきます。ありがとうございました。

(司 会)：河合先生、そして豊口先生、大変ありがとうございました。皆様、どうぞお二人にもう一度盛大な拍手をお送りいただけますでしょうか。大変ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、我ら信濃川を愛する信濃川自由大学、第4回講座を終了させていただきます。本日は長時間にわたりましてご参加をいただきまして、誠にありがとうございました。